

虹くじら

創刊!

千船病院広報誌 2022 夏号



消化器内視鏡センター

「千船病院は小さくはないが大病院でもない。
だからこそ地域に根ざした医療ができる」

産科救急

「どんな背景があろうと、私たちは医療人として、
目の前の母子のために最善を尽くすだけ」

減量手術チーム

「減量はしんどい。だからこそ、チーム医療が必要」

院内助産院に密着「自然分娩」24時



名方勇介(左)と船津英司(右)

消化器内視鏡センター

千船病院は小さくはないが大病院でもない。だからこそ地域に根ざした医療ができる

消化器内視鏡センターは24時間対応、夜間休日であっても内視鏡手術が可能である。困った人がいれば助ける、可能な限り患者を断らない——千船病院の哲学がはっきりと現れている部署でもあるのだ。

取材・文 田崎健太

1968年京都市生まれ。虹くじら編集長、ノンフィクション作家。早稲田大学法学部卒業後、小学館に入社。『週刊ポスト』編集部などを経て独立。著書に『偶然完全勝新太郎伝』『球童 伊良部秀輝伝』（ミズノスポーツライター賞優秀賞）『電通とFIFA』『真説・長州力』『真説佐山サトル』『全身芸人』『スポーツアイデンティティ』など多数。(株)カニジル代表として、鳥取大学医学部附属病院一階で「カニジルブックストア」を運営。

写真 奥田真也

02 千船病院広報誌「虹くじら」について

03 消化器内視鏡センター 特集01

「千船病院は小さくはないが大病院でもない。だからこそ地域に根ざした医療ができる」

08 ちぶね〜せ 看護部（病床管理） 西川絢子

10 ちぶね〜せ リハビリテーション科 椎葉勇生

12 院内スタッフが撮影 輝け！インスタ映えスポット「ベスト8」

13 産科救急 特集02

「どんな背景があろうと、私たちは医療人として、目の前の母子のために最善を尽くすだけ」

19 COLUMN ストリートメディカルとは何か？

20 ちぶね〜せ 麻酔科 角千里

22 ちぶね〜せ 手術室看護師 橋爪紀香

24 減量手術チーム 特集03

「減量はしんどい。だからこそ、チーム医療が必要」

29 【フォトルポルタージュ】院内助産院に密着「自然分娩」24時

34 ケーキから和菓子まで、なんでもあり！西淀川区「スイーツ散歩」

36 QRコードで飛べる「一言つき」診療科案内

38 編集委員から一言

千船病院広報誌「虹くじら」について

千船病院の始まりは、日本の高度成長期、1950年代後半に遡ります。当時、大阪府から兵庫県に掛けての海沿いが工場地帯として開発されていました。医療に恵まれない中小企業労働者に適正な医療の機会を与えたいという有志の方々が現れたのです。

1958年3月17日、大阪市西淀川区佃町3丁目、阪神電車の千船駅前（阿部診療所）が開設。阿部とは診療所にアルバイトとして勤務する医師の名前をとったものでした。この時点では医療法人としての申請も通っていない、見切り発車のような状態だったといえます。とにかく困っている人を救いたい、という思いが先走っていたのです。

58年11月に医療法人愛仁会が設立され、翌59年1月に医療法人愛仁会千船診療所と名称変更。66年5月、千船病院へと発展しました。

2017年からは現在の場所である、阪神電車福駅前（新病院）として移転。現在、病床数292、21診療科を有する急性期総合病院です。

草創期、そして高度医療を提供する今も変わらないのは、地域の方々に最高の医療を提供しようという強い意思があること。困った患者さんがいれば、可能な限り受け入れるという姿勢です。

病院のある西淀川区は、クジラのような形をしています。大きなクジラのように、多様性（＝虹）ある人々を受け入れる存在になりたい。そんな思いから千船病院の広報誌に「虹くじら」という名前をつけました。



器内科が有名でした。消化器のがんって多いじゃないですか。それで消化器内科はいいなと。内視鏡という器械をいじったりするのも好きでしたし」

内視鏡手術とは、口から内視鏡——臓や体腔の内部を観察する機器——を挿入して行う手術のことだ。カメラと強い光源により、体内を明るく照らし、鉗子や処置具を操作して手術を行う。開腹手術と比べると身体への負担、つまり、侵襲しやうが少なく、術後の回復が早い。

最初に担当したのは、胃がんとわすらった年配の女性だった。「胃がんで胃が狭くなっていてたんで、ご飯を食べられへんかったんです。そのときちょうど、ステント留置っていう治療が出てきたときだったんです」

彼女は内視鏡手術で金属製のメッシュ構造をした筒状の医療器具を患部に置き、消化管を広げる「消化管金属ステント留置術」を受けることになった。

「それまでご飯を食べられなくて点滴していたおばあちゃんがご飯を食べられるようになった。すごく喜んでくれたんですね。これから内視鏡で色んなことができるようになっていくだろう。それで消化器、内視鏡医になろうと思ったんですね」

内視鏡手術の技術を上げるには、多くの患者を治療し、経験を積むことだ。第一赤十字病院の救急科では、各科の医師が持ち回りでオンコールを担当していた。

オンコールとは、救急搬送時に勤務時間外であってもいつでも対応できるように待機することを指す。

「オンコールをやっていたがらない先生もいますよね。そこではくはやらせてくださって、代わりました。さらに（医師になつて）4年目ぐらいのとき、上の先生に迷惑掛けないようにしますんでって、若手の6人ぐらいの医師でオンコール表を作って回っていました。朝から晩まで通常業務プラス夜間（診療）です」

1日で13人の内視鏡を使った吐血、下血の対応をしたという記録は未だに第一日赤では抜かれてへんのちゃうかなと船津は笑う。

いずれは大学病院に行く、それまでの腰掛けのつもりだった

通常、外科手術は執刀医の他、助手、看護師、麻酔科の医師などチームで行う。内視鏡手術では、突き詰めれば内視鏡医、そして看護師、2人で手術が可能なが特徴の1つだという。

「自分さえやると決めたらやれる。運転にたとえれば1人でドライブしているような感じに近い。責任感は重いですが、だからこそ達成感も大きい」

ある程度、自信ができてきた2007年頃、神戸大学医学部附属病院に移っていた元上司から一緒にやらないかと誘われ

思っていたんと全然違うやん、と船津英司は思わず呟いた。

2008年4月、千船病院は船津を迎えるにあたって、消化器内視鏡センター（以下、内視鏡センター）を新設することになっていった。一度、現地を見てみようと思いを運んだのだ。そこは窓のない10畳ほどの部屋だった。ここに内視鏡室、洗浄室、待合室を作らなければならぬ。かなり狭い。話が違うのではないかと、船津は案内してくれた病院関係者に、ややとげのある調子で訊ねた。すると相手は「お渡しした図面通りの部屋ですよ」と事もなげに返した。

「図面ってね、魔法みたいな感じでめっちゃ広く感じるんです。先生、よく見てください。確かにその通りなんです。うわ、この広さでやるのはきつい、というのが最初の感想でした」

センターの立ち上げメンバーは、船津、そして専攻医の2人。専攻医とは初期研修を終えた後、専門研修プログラムで学ぶ医師のことを指す。かつては後期研修医と呼ばれていた。

この内視鏡センターでゆくゆくは医師、専攻医を広く迎え入れるつもりだった。優秀な医師たちを惹きつけるには、魅力的な環境を整えることが必須である。そこで関西地区では珍しかった超音波内視鏡という最新機器を導入していた。機器はともかく、物理的な広さが足りないとい

た。そのとき、たまたま千船病院を運営する愛仁会から、内視鏡センターを立ち上げたいという相談があったという。ゼロからセンターを立ち上げるには、内視鏡手術に関する幅広い知見、臨床の経験が必要となる。そこで船津に白羽の矢が立った。いずれは大学病院に行くという約束のもと、腰掛けのつもりだった。

消化器内科の先生が2人来る、彼らがセンターを立ち上げるという話を一般内科病棟の看護師だった奈良崎由香が聞いたのは、2007年の終わり頃だったと記憶している。

「具体的にどうやっていくのかは決まっていなくて、先生方が来られてから、というふわつとした話でしたから、あつ、そうなんやみたいな感じでした」

奈良崎が所属していた「四一病棟」が消化器内科病棟に充てられることになり、病棟内で消化器内科チームが立ち上がった。

「そのとき私も手を上げたんです。手を上げたのは5人ぐらいでしたかね」

船津の第一印象は、熱い人やな、だった。「船津先生は、患者さんに対して色んな医療を提供していきたいということ、あんなことをしたい、こんなことをしたいって熱く語っておられた。当時の千船病院はどちらかというと年配のおとなしい先生が多かった。そんな中、ぐいぐいと色んなことを押し進めていこうとしているんだなと」

船津は暗い気持ちになった。

旧知の医療機器メーカーの担当者たちが「先生、内視鏡センターを作ってもらったらしいですね」と顔を出した。彼らは、部屋を「警（いっせつ）すると、商機がないと判断したのか、ため息まじりに「また来ますね」と帰って行った。

「一時期は凹みましたね。ここで1年か2年やって、大学病院に戻ろうと思っていました」

船津は1973年に京都市で生まれた。父親は東映大泰映画村のすぐそばでオートバイ店を営んでいた。子ども時代は機械いじりが好きで、いずれは工学部で学び、ロボットを作ってみたいと臍氣おぼろけに考えていた。

「うちのお袋が、工学部に行つてロボットとかいじつたりしていると、あんた引きこもりになるで、人と接する仕事をせなあかんつていうんです。確かにオタクみたいなところがありました。それで人を治すのも面白いかなと思うようになって、そのときの学力に合った、京都府立医大に行くことにしました」

京都府立医科大学卒業後、京都第一赤十字病院で研修医として歩み始めた。研修終了後は、がんの研究をするつもりだった。

「第一日赤（赤十字病院）の消化器内科部長の兄弟子に当たる方が、日本で初めて十二指腸乳頭切開術をした先生だったんです。そうした関係で第一日赤は消化

船津は奈良崎よりも4才年上の34才。もう一人の専攻医が奈良崎と同じ年だったことも親近感が増した。

船津は千船病院に来るとすぐに「消化器内科カンファレンス」を始めている。患者をどのような方針で治療するのか、情報共有する会議である。医師だけでなく看護師たちも含めた多職種カンファレンスの先駆けだった。

「治療だけでなく、看護師にどんな役割を担って欲しいかのレクチャーを兼ねた会にしたいというのが船津先生の考えでした。新しい治療を学ぶこともありましたが、勉強会に近い感じでした」

カンファレンスは、病棟の看護師たちに出席しやすい曜日、時間を事前に問うて「会」の日時を設定した、はずだった。「消化器内科チームに手を上げたメンバーとそうでないメンバーの温度差があったかもしれない。なかなか人が集まらなくて、結局、消化器チームのメンバーだけということも多かった」

ある日、船津と奈良崎の2人だけだったことがある。「みんな忙しいから、人集まらんよね」と船津が寂しそうな顔で言ったことが奈良崎の印象に残っている。

船津は救急医療にも力を入れた。消化器内科はオンコール体制ですべての救急患者を引き受けると宣言したのだ。船津は家族を京都に置いたまま、病院に隣接した寮に単身赴任することになった。本来は研修医が使用するためのワンルーム

マンションである。そして、救急患者対応の他、1日に2、3度、病棟に足を運んだ。

その熱意を意気に感じた奈良崎たち、消化器内科チームのメンバーは他の看護師たちに「一緒に話を聞こう、混じろう」と声を掛けた。気がついたときには、消化器内科チームとそれ以外の壁は消えていた。

千船病院に来たばかりの船津が「俺、ここにいるのは2年だけやねん」とうそぶく姿を奈良崎は覚えている。

「その辺、全然隠すことなくオープンにしていました。最初の2年が終わる頃、今年で終わりやと言っていたんですが、1年延びた。そうしたらまた、今年で終わりやと」

そう言い続けているうちに今に至るという感じですが、とくすくす笑った。

若い先生たちが最前線でやっていて姿を見て、自分もここに続きたいと思った

名方勇介が千船病院を研修先の選択肢に入れたのは、岩手医科大学医学部卒業前の、2014年頃だった。千船病院の病理診断科の医師である父親から、内視鏡手術を専門とするならば、自分の病院も悪くないと薦められたのだ。

名方は1989年に兵庫県西宮市に生

に気がついた。

例えば、止血――。

内視鏡から止血用クリップと呼ばれる医療用ホチキスを入れて、血管を挟み込んで出血を止める。

「内視鏡カメラで映る画面自体は大きい。画質もいいんです。でも、カメラをどう動かすかによって見え方が変わってくる。処置部をきちんと把握した上でクリッピングしなければならぬ。自分がやっていてなかなかできなくて時間が掛かってしまう患者さんでも、船津先生に代わるとすぐにできてしまう」

内視鏡のカメラが映し出す映像は2次元、また内臓の形には個体差がある。内臓の構造を知悉した上で、奥行き、厚みなどを計算して、鉗子を正確に、そして素早く動かさなければならぬ。

治療はもちろん大切ですけど、トータルで患者さんを診られる医者になりたい

2017年7月、千船病院は阪神電鉄福駅そばに新病院となって移転した。船津は新しい内視鏡センターの設計から関わることになった。「また設計図の魔法に引っかけた」と船津は言うが、彼のこだわりは十分に反映されている。

通常の内視鏡機器の他、小腸バルーン内視鏡、カプセル内視鏡、胆膵疾患の処



置に使用する胆道鏡や電気水圧衝撃波結石破砕装置などの特殊内視鏡機器を設置。内視鏡検査室はプライバシーを守るためにすべて完全個室。壁紙にもこだわった。「患者さんにとって検査、手術ってしんどい。だから綺麗な環境で、変な表現ですけれど、ちょっと高級感があれば、少しでも心が軽くなる」

新病院となった後も船津は単身赴任生活を続けている。彼が考え続けているのは、いかに地域に密着した高度な医療を提供するか、である。「ドクターってつっけんどんで偉そう、というところがあると思うんです。でもそんな人は絶対嫌なんです。患者さんにとって話しやすくってなんでも相談できる、親身になってくれる消化器内科医でありたい。うちの医師にはそういう風になっ

まれた。祖父、父親と医師の家系である。早くから医師になるつもりだったのかと問うと、大きく首を振った。「ぼく、医者になるの嫌でした。結構、頭悪かったんです。父親からはお前の頭じゃ医学部なんか入れへんって言われていました。高3から予備校行っただけですけど、こんな自由な時間があるんやって遊んでました」

2年間浪人した後、岩手医科大学医学部になんとか滑り込んだ。受験はほんまに苦手でした、未だに入学試験に落ちる夢を見ますと、名方は頭を掻いた。「医学部の1年目ってというのは数学とか教養課程なんです。そのときは留年しちゃうぐらい成績が悪かった。2年生になって解剖が始まると面白くなってきた。4年生から臨床(実習)に入って、各科

の基礎をやっていくんです。実習に行くのは無茶苦茶楽しかった。上の先生からお前、やってみるかと言われたら、チャンスやと思って、どんどんやらせてもらいました」

医者の家系で半ば強制的ではあったにしても、医学部に来て良かったと思った。岩手での生活は気に入っていた。そのままだ残ることも考えたが、これまで世話になった家族のため関西に戻ることにしたのだ。

「千船病院の」内視鏡センターが盛り上がっているというのを父から聞いていました。若い先生たちが最前線でやっている姿を見て、自分もここに続けたいいなと思いました」

2015年4月、名方は専攻医として千船病院に入職、病院に近い寮に住むことになった。

「千船病院の」内視鏡センターが盛り上がっているというのを父から聞いていました。若い先生たちが最前線でやっている姿を見て、自分もここに続けたいいなと思いました」

とになった。

「病院から歩いて5分ぐらいのところにある、昭和な感じのアパート、ワンルームです。仲のいい先輩が近くにある住宅に住んでいて、その人がオンコールで呼ばれたときははやくも一緒に行っていました。先輩の横に立っての介助ですね。夜中に呼ばれたら人も少ないので看護師さんと一緒にやっていました」

もちろんオンコール対応に付き合うのは専攻医の義務ではない。「やれとは言われたこともないし、嫌々でもなかった。早く仕事を覚えたいという気持ちがありました。消化器内科は患者さんのためにみんなでやろうという雰囲気があったんでしようね。先輩が呼ばれたら、当然のようにはやくも行くという感じでした」

初めて止血をした患者のことを今もよく覚えている。「無茶苦茶、血を吐いた45才ぐらいの若い患者さんが運ばれてきたんです。胃カメラで調べたら、胃潰瘍ができていて、そこから出血していた。その出血を初めてきれいに止めることができました」

その患者は血を吐いたことがきっかけで、がんが見つかり、早期治療に繋がった。怪我の功名だった。

2年間の研修期間の後、2017年4月に名方は正式に診療部消化器内科に入った。先輩医師に交じって内視鏡手術を積み重ねるうちに、改めて船津の凄さ

それがすごく嬉しかった。処置をするのも大事ですけど、心を通わせるケアができるようになっていこうというのが多くの根底に流れている」

千船病院は小さくはないが、大病院ともいえない。だからこそ、地域に根ざした医療が実現できるはずだと船津は信じている。

「世界には、お金に糸目をつけなければ、まだ普及していない最先端の治療、最高の治療を受けられる場所があるかもしれない。千船病院でそれはできなくても、現状のガイドラインで定められている最良の治療はできるし、やらなきゃいけない。わざわざそういうところに行かなくても、千船病院で先生に診てもらいたいという医師にならないといけない」

まだまだあかところもあるんですけど、やろうと思えばここは変えられる、可能性があると思ってるんですよと、自らに言い聞かせるように呟いた。

その思いは、後進の名方たちにしつかりと引き継がれている。

「内視鏡をはじめた頃は、血を止めることがものすごく気持ちよくて、楽しかった。そこにやり甲斐を感じていました。でも何年か過ごすうちに、患者さんの人生、背景を見ることが大切だと思うようになってきました。治療はもちろん大切ですけど、トータルで患者さんを診られる医者になりたい」





ちぶね～ぜ

看護部(病床管理)
西川 絢子 主任

8東		38 → 38	2	0	GS×1	
8西	陽性 速い 一般	陽性 速い 一般 5 → 5 一般 22 → 22	入院 COVID 一般 1 速院 COVID 一般 1	1	7×1	7
7東		37 → 36 5	入院 2 速院 4	5		10
7西	39	39 → 34	2 5+(2)	2	6×2	7+MCC 42
6西 6東		53 → 51	3+ICU 4+2?	1	CART×1	1+3
1/1-2	産科					11+3 1 2 6

「現場の皆さんが『神』なんですよ。感謝しかないです」

西川絢子の仕事は、千船病院の全292床のベッドをコントロールする「病床管理」である。外来、救急患者、近隣病院からの紹介患者の入院依頼状況を把握し、看護師や医師、地域医療の窓口などと連携をとり、ベッドを効率よく稼働させる。ベッドの稼働率が低すぎれば、病院経営に響く。しかし、100パーセント埋めれば良いというものではない。「9割をキープすることが目標。1割の空きベッドがなければ緊急性の高い患者さんを受け入れられなくなる。患者さんの状態によってはやむを得ず受け入れをお断りすることも重要な仕事なんです」

千船病院は、急性期医療を担う地域医療支援病院、救急指定病院でもある。急性期にある緊急性の高い患者の受け皿を確保する使命があるのだ。

「適切な病床管理をすることは、千船病院の経営を守り、ひいては約900名の職員、患者さん、地域医療を守ることにもつながるので……責任重大です」

病床管理は効率よく病床を埋めていくゲームのテトリスのようなものと思われるかもしれない。しかし、それも違う。患者の疾患、重症度、年齢、認知機能、日常生活動作の指標であるADL、治療内容などを鑑みて、その状態に適した

ベッドを確保する。患者の担当診療科のベッドに空きがないときには、他の診療科と交渉して受け入れてもらうこともある。西川は「どこも、うちの病棟は忙しいから」と受け入れ拒否されてもおかしくない状況なんです」という。そこで彼女が力を入れてきたのが病床の「見える化」である。

入院や手術予定の患者数、看護師数など病床に関する情報を会議で共有。ホワイトボードや電子カルテでも看護師や医師が確認できるようにした。

「院内全体の状況が客観的に見えると、他の科も大変なんだ」と、受け入れに動いてくれることがあります」

また、長期入院患者のリストを公開し、退院までのゴールを現場に意識してもらうことにした。

「患者さんの課題を把握した綿密なケアを、医療スタッフが丸となって実現してくれています。その結果、早期に退院してもらえ、急性期医療を必要とする新たな患者さんを受け入れることができるという、良い循環が生まれています」

千船病院の病床管理は、西川1人に任されている。西川にその苦勞を尋ねるたびに、現場の皆さんが「神」なんですよ、と周囲への感謝を口にします。この人柄こそが、千船病院のベッドを円滑にコントロールできている鍵なのかもしれない。

取材・文中有紀 写真 奥田真也



上司であり、トレーニング仲間でもある坂口勇貴 PT (写真左) と椎葉勇生 (右)

寝め上手の筋トレ理学療法士は、千船病院の「ローランド」

「毎日お昼休みの20分間と帰宅後に、腕立て伏せと腹筋を各100回しています」

千船病院にて、患者の医学的リハビリテーションを担当する理学療法士(PT)の椎葉勇生は、患者からも「ええ体やね」と言われるほど鍛え上げた肉体の持ち主だ。椎葉のストイックさは、仕事でも同様だ。千船病院を運営する社会医療法人愛仁会に就職したのも「研修が充実していて、勉強し続けられると思ったから」と明かす。愛仁会の中で、尼崎だいてもつ病院、そして千船病院とキャリアを積んできたのも、異なる「病期」の患者を担当し知見を深めたかったから。回復期の患者が多い前職と急性期の患者が主の千船病院では、理学療法士の計画も実施も、患者への接し方も異なることが多い。「千船病院では怪我や病気をしたばかりの急性期の患者さんを担当しています。ドクターからも、治すのはリハビリ科」と言われるほど、急性期の理学療法は重要です」

現在、椎葉はリハビリテーション科で脳卒中チームのリーダーを務めている。「前職で脳卒中の患者を多く担当した経歴に加えて、個人的にも脳卒中関連の勉強会で学び続けてきたことから指名された。

「特に脳卒中の場合、どのような理学療法を実施するかによって患者さんのその後の身体能力、さらには人生まで変わってくるとも言えるので、やりがいと責任を感じます」

椎葉が患者に対して心がけているのは、肯定感を高める声かけをすること。そこで自身が筋トレで肯定感を高めてきた経験が活きる。理学療法は身体機能が低下している部分の回復に着目されることが多いが、椎葉はひと味違う。各患者のできることを探して「○○ができる人」として接する。そうすることによって、声かけも変わってくる。「頑張っているから、こんなことができようになっていますよ！」

椎葉のひと言は、できないことばかりに意識がいきがちな患者に対し、改善への気づきを与え、辛い理学療法へのやる気をも芽生えさせる。信頼関係が生まれると、理学療法も継続してもらいやすい。寝め上手だからと「有名ホストの」ローランドさんみたい」と言われることも。「先生やから信じられるわ、と言って頑張ってくれた患者さんが、日常生活に戻れるようになったときに、先生で良かった、ありがとう」と言われると幸せです。何度聞いても本当にうれしい言葉ですね」

産科救急

どんな背景があろうと、私たちは医療人として、目の前の母子のために最善を尽くすだけ

千船病院は年間100件以上の母体搬送を受け入れ、年間分娩数は、2022年度で2442件。この数字は大阪府内で一番の数字である。この中には医療機関を受診しなかった「未受診妊婦」が含まれている。産科の方針も、患者を断らないこと。そのために日々、心を砕いているアンサングヒーロー——無名の人たちがいる。

取材・文 田崎健太 写真 奥田真也



PHOTO SPOT

院内スタッフが撮影輝け！インスタ映えスポット「ベスト8」

病院スタッフからお気に入りの場所、景色を募集しました！
スタッフしか目にできないレアな写真や、素敵な景色まで。みなさんも千船病院の素敵な映えスポットを探してみてください！



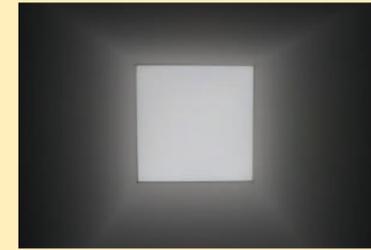
01



大人の目線では気づきにくい小児科病棟の手すりの下にも、入院中の子ども達に喜んでもらえるようにとスタッフ手作りの映えスポットがありました！
(撮影者 D.D)

02

節電中のスタッフ専用フロアに、太陽が優しい明かりを届けてくれる映え（トップライト）を発見です。
(撮影者 Y.F)



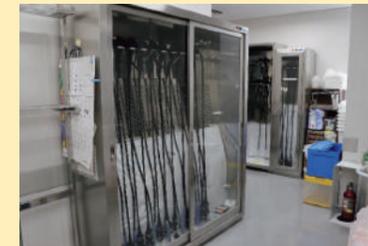
04



当院のMRI室、実は隠れた映えスポットです。天井がステンドグラス風で検査の前に少しでもリラックスしていただくと嬉しいです。
(撮影者 H.T)

06

ずらっと並んだ内視鏡、実はこれ、まだまだ一部分なんです。あれ、映えてない？ワクワクするのは私だけでしょうか・・・？
(撮影者 T.O)



07



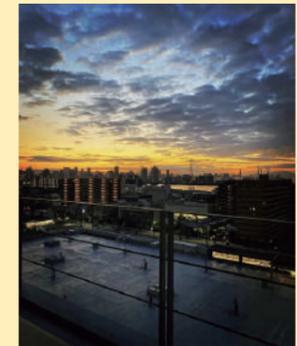
こちらは何の写真でしょう？薬剤科で見つけた、メカ好き必見の映えスポット(?)。おくすりのアンプルの機械の内側は、こんな風になってるんです。
(撮影者 A.I)

05

栄養管理科から届いた、テンションが上がる正統派の映え写真！出産を終えられたママさん達にお出ししているフルーツタルトです。(土曜日限定メニュー)
(撮影者 A.S)



03



病棟看護師より、夜動明けにしか見られない貴重な朝焼けの写真をお届け！澄んだ空気まで伝わってくるような1枚です。
(撮影者 M.F)

08



小児科病棟のプレイルームは、子ども達はもちろん大人もリフレッシュできるスポットです。カラフルな鳥たちが自然の中から飛んできたような景色はまさに「映え」！
(撮影者 F.S)



（2階から8階西へ移動 業務用エレベーター使用中止 お願います）
このアナウンスが流れると、病院内の空気がぴりりと固くなる。新型コロナウイルスの疑いがある患者が2階の救急受付に運ばれてきたのだ。8階西病棟は新型コロナウイルス対応の専用病棟となっている。

サイレンを鳴らした救急車が到着し、眼、鼻、口を覆う防護具、帽子、医療用ガウン、手袋を身につけた医師、看護師が中に乗り込んでいく。未受診妊婦、と思われる患者だった。
産婦人科の北采加は「ほんとうに暑くて、苦しいんです」と苦笑いする。「自分の息で（防護具が）曇ってしまい、前が見えなくなったりして、大変」

未受診妊婦は（妊婦健診を1回も受けずに分娩、または入院に至った）（全妊娠経過を通じての妊婦健診受診回数が3回以下）（最終受診日から3ヶ月以上の受診がない）と定義される。

「お腹がいたい、出血があるという女性が運ばれて来た場合も婦人科医でもある私たちが担当します。陣痛だったら、お腹が膨らんでいますし、ぱっと見で分かります」

そんなときは心の中で「陣痛やないかあー、早よ呼べやー」と思わず叫んでしまう。

「ほんまに（陣痛だと）怪しいときは、車内ですぐに内診します。まだ産まれそ

うにないときは、（PCR）検査に回ってもらいます。緊急を要する場合はそのまま分娩室に移動、私たちは感染症対策をして、お産をすることになります」

未受診妊婦といえ、妊娠の知識がない10代、あるいは20代前半の女性を想像するかもしれない。しかし、実際には30代、40代も多いという。なぜ受診をしなかったのかという問いに対して「生理不順だから気がつかなかった」「便秘だと思っていた」「太ったのかと思っていた」という答えが返ってくる。

「そんなはずはないだろうと思いつつも、母体、そして赤ちゃんのためにできることをするだけです。受診しなかったことを責めることはないです。過去は過去なので」

1991年生まれの北が関西医科大学で産婦人科を志望したのは、産婦人科医を主人公としたテレビドラマ『コウノドリ』がきっかけだった。

「ドラマに感化されたというか。産婦人科を選んだ人はみんな言うと思うんですけど、命の大切さを一番感じる診療科ですね。おめでとー。って患者さんに言えるのって、産婦人科ぐらいじゃないですか」

そしてもう一つ、出産の緊急性にやり甲斐を感じたのだ。

「お産っていうとみんな元気に生まれてくるっていうイメージがあるかもしれませんが、一定の確率で悲しいことが起

縁組という制度もありますよという話をすることになる。その辺りは社会福祉士の方にお任せします。千船病院にはそうした対応に慣れている社会福祉士がいます。彼女たちがぼくらが知らない情報を聞き出して、行政など地域と繋いでくれる。だからこそ、我々はどうな方でも受け入れることができる」

社会福祉士である斉藤りさが、千船病院の医療福祉相談科で働くようになったのは、2010年のことだ。

「四国で生まれて都会に出て、それから神戸で営業事務として働いていました。大学に行きたかったんですけど、元々貧乏だったので父親から、国立しか無理」と言われて諦めていました。社会人として働いて約10年経ったとき、突然母親から、前に大学行きたいって言って

いたでしょ、今なら助けてあげられるよ、と言われたんです。その翌日から受験勉強

千船病院は、おそらく日本で最も多く「未受診妊婦」を受け入れている

北が千船病院で受けた「カルチャーショック」の1つは、未受診妊婦のよう「様々な社会背景の患者さんがいるのだ」と知ったことだ。彼女の人生で出会うことになった人たちだった。

産婦人科主任部長である岡田十三によると、千船病院では年間30人ほどの未受診妊婦を受け入れている。

「大阪府では1番多い。正式なデータはないと思いますが、おそらく日本で1番多い部類に入るはずですよ。未受診の方は、恵まれた生い立ちではない人が多い。親から愛情を注がれずに育ってきた人、パートナーに恵まれていない人、社会的に孤立している人。社会的な問題を抱えている人といつてもいいかもしれません。家族と連絡をとっていない人がほとんど。家族に頼れない人たちなんです」

彼女たちのほとんどには出産後のサポートが必要になる。親から愛情を受けてなかったせいか、子どもへの接し方が分からない。

「生後1年以内の赤ちゃんの死亡の中で特に多いのが、最初の1ヶ月以内。お母さんが連れて帰ってすぐに虐待ということも多い。そこで家族に頼れないんで、行政の支援を受ける、あるいは特別養子

るのが現実。昔、出産は命がけって言われていましたよね。それまで順調だった妊婦さんでも、お腹の中の赤ちゃんがすぐくしんどうい状態になったとか、30分以内に赤ちゃんを出さないといけないという場合があるんです。何が起るかわからないって、私たちは考えています」

通常の分娩においても、経陰分娩で行くのか、吸引分娩、あるいは陣痛促進剤を使用するのか、帝王切開か、という選択がある。この判断で重要になるのは場数である。北が千船病院を選んだのは、大阪府内で最も分娩件数が多かったからだ。

「最初はカルチャーショックを受けました。お産は修羅場でした。産科を、あぁいいなあって、ふわっとしか見ていなかったことに気がつきました」

北が千船病院に来たばかり、1年目のことだ。
「初めて担当させてもらったのが双子がお腹にいる妊婦さんだったんです。（妊娠）30週という少し早い時期で帝王切開することに決めました。彼女は、私がペーデーだということを分かっているんです。先生、双子ちゃんやったことありますか。って聞かれたんです。私は正直に、初めてです。って答えたら、先生に任せます。って」

無事に出産が終わった後、彼女から「北先生に診てもらって良かった」と言われたことが本当に嬉しかったという。





んな仕事なのか全く知りませんでした。カタカナで格好いいなくらいにしか思わなかったんです」

卒業後、大学の恩師から、千船病院でソーシャルワーカーを募集していると教えられた。

「いっぱい応募者がいるから健闘を祈ります、みたいな感じでした。落ちてでも次、先生が紹介してくれるだろうという軽い気持ちで行ったら、受かったんです」

後から、そんなに（応募の）人が来ていなかった、人が足らず即戦力を求めていたのだと教えられた。社会経験のあった斉藤が選ばれたのは必然だったろう。

千船病院は、病気や怪我が発症したばかりの、いわゆる「急性期」の患者に対応する医療機関である。急性期を脱した患者は家庭に戻す、あるいは回復期を担当する医療施設に移す。医療福祉相談科のメイカル・ソーシャルワーカー（MSW）はその架け橋となる存在だ。そこには未受診出産のサポートも含まれる。

斉藤が入職して1ヶ月も経たないときのことだった。

「入籍をしていない20才過ぎの女の子と赤ちゃんが救急車で運ばれてきたんです。トイレで落ちた子を抱きかかえて、救急隊がへその緒を切って。そのとき、未受診（妊婦）が連続していて、みんなテンパっていて、悪いけど（自分たちは）できひんから、そっちの人やっておいてね」って。それで私が担当すること

強を始めて、1ヶ月で受験しました」

せっかく行くのならば、何か資格を取ることができる大学、学部がいい。以前、看護師をしている姉から、ソーシャルワーカーに向いているのではないかと勧められたことを思い出した。調べてみると、ソーシャルワーカーとして働くには社会福祉士という国家資格を持っているほうがいいことが分かった。そこで、自宅から最も近い、社会福祉士の資格が取得できる大学を選んだ。

「そのときは、ソーシャルワーカーがど

になったんです」

幸い、母子ともに健康状態は良かった。斉藤は女性に付き添って、出生届を出すために区役所に向かった。しかし、窓口の担当者は提出した書類を「警（いっせつ）する」と、これでは受理できませんと首を振った。

「そのときに初めて知ったんですけれど、病院で生まれていない赤ちゃん、つまり自宅出産の場合は、病院で記載した出生証明書では受理できない。救急隊の搬送証明書、本人が記載した出産時の報告書、病院の医師の意見書などの書類が必要になる。そのとき、赤ちゃんのお父さんと名乗る人は60才を過ぎていて、随分と年が離れている方でした。書類を揃えるお手伝いも再提出も、一緒に同行させてもらいました」

数ヶ月後、無事に出生届は受理された。

「うちが未受診出産を受けなかったら、結局、どこもとってくれへん」ということやろ」

「未受診で来られる方は、嘘をつく人が多いんです。他人の名前を名乗って、知人から保険証を借りてくる人。産まれた後、赤ちゃんを残して行方不明になってしまう人もいます」

健康保険加入の申し込み前に母親が失踪してしまえば、医療費は未払いとなる。そのため、医療機関は未受診妊婦を避け

がちになる。また、出生届が提出されていなければ、新生児は無戸籍となる。

「未受診の方をたくさんみていると、嘘ついているとか、この人逃げるかもっていうのが面談している中で感じられるようになります。ある1人の女性が未受診で運ばれてきて、逃げそうな予感があったので、退院時に役所まで一緒に行き、出生届や国民健康保険の手続きまで済ませました」

その約1年半後、同じ女性が再び救急車で運ばれてきた。またもや未受診妊娠だった。

「2回目の出産が終わった後、自分が席を外して、他の人に代わってもらっている間に、彼氏と入籍をしたいから、ちょっと家に荷物を取りに行きたいって言い出したらしいです。そして、そのまま帰ってこなかった」

生まれたばかりの新生児は置いたまま、である。

斉藤は児童相談所の担当者と彼女の自宅へ行き、何度もインターフォンを押したが反応はない。しばらく待った後、手紙を残して引き上げることにした。しかし、連絡はなかった。病院長、児童相談所、区役所戸籍担当者と相談して、なんとか出生届は受理してもらった。

「唯一の救いは、出生届を途中で書いており、（新生児の）名前を記載してくれていたことでした」

新生児は乳児院に引き取られることに



ストリートメディカルとは何か？



千船病院では横浜市立大学と共同研究契約を結び、「Street Medical (ストリートメディカル)」の検証・実証実験を進めています。

ストリートメディカルとは何か——。

例えば「ポケモンGO」。ご存じのように、このゲームは、スマートフォンの位置情報を活用、現実世界そのものを舞台として、不思議な生き物「ポケットモンスター」(ポケモン)を捕まえたり、バトルさせるゲームです。実はこのポケモンGOをプレイすることで、「活動量」が増えるという論文があります。ポケモンを捕まえるために動き回ること、結果的に健康に繋がるといいます。健康になろうと思ってポケモンGOを始めた方は少ないでしょう。楽しいと始めたことが結果的に健康になる。これがストリートメディカルの視点の一つ。

ストリートメディカルとは、「人として本来的に在りたい状態」を追求するため、今までの

概念に捕らわれない新たな医療と定義できます。

そこには文学やデザイン学、アートやゲームまで含まれるのです。

医療場面において、外の景色を見たほうが術後患者の治癒が早いという論文があります。一見、外の景色を見ることが治療は無関係に思われます。しかし、生活の中で主観的に幸福を感じることが健康に影響を及ぼしている可能性があります。

病院は治療の場であるだけでなく、患者さんの生活の場所でもあります。患者さんがそこで主体的に「happy (幸福)」を感じて頂けないか。そう思って、千船病院ではデザインやアートの展示を増やしています。その一つとして、1階「相談室」にアートを展示しています。

今後も病院が楽しくなるような仕掛けをどんどん作っていきますので、ご期待ください。

文 村田尚寛 (千船病院リハビリテーション科科長) イラスト 矢倉麻祐子

なった。

しかし、これでは終わらなかった。更に約1年後、彼女が千船病院に現れたのだ。またもや彼女は妊娠していた。やはり、未受診である——。

齊藤は彼女の顔を見て「あ、久しぶりやな」とわざと明るく声を掛けた。

「出産の後、本人は、また彼氏と入籍しようと思っていると言っています。ああ、分かっている、分かっている、入籍は分かっているけど、先にこの書類だけ書いてねって。いつ逃げられてもいいように、出生届や委任状などの書類を準備したんです。千船病院は今、(出産後) 4日目退院が普通。彼女は2日後ぐらいに、忘れ物を取りに行きたい」と言い出したんです。帰ってくることを約束してもらったんですけど、やっぱり戻ってこなかったです」

齊藤はMSWの仕事を「必要な部署に繋ぐこと」であると定義する。医師でも看護師でもない。医療の専門家ではないからこそ、患者の声を聞き、寄り添うことができる、と。真摯に向き合った相手に、裏切られたときはひどく傷つく。医師でないため時に軽く扱われ、心ない罵声を浴びせられることもある。

「私たち人間ですから、嫌なことがあると潰れそうになります。実際に潰れていった人もいました」

50才になったら、仕事を辞めようとして、数年前、病気を患い

1ヶ月入院することになった。

「あまりに仕事が多くなって、退院の翌日から出勤したんです。そうしたらお世辞やと思うんですけど、みんなが良かった、帰ってきてくれて、って。ほんと、ありがたいと思いました。辞めるのはいつでも辞められる。私、仕事以外やることないやんって」

齊藤はまだまだ働き続けるつもりだ。子どもがいらないから、仕事以外で自分のことを必要とされているって感じがしないですよ、と明るく笑った。もちろん謙遜の言葉である。

「この病院では、病院長、産婦人科の先生、小児科の先生、助産師さん、みんなが協力してくれる。産まれた子どもがきちんと育ってくれるよう、私の立場でやるしかないんです」

齊藤はそんな病院で働いていることを誇りに思っている。乳児が遺棄されたという類の事件が起きたとき、岡田がこう言ったことが頭から離れない。「うちが(未受診出産を)受けなかったら、結局、どこもとってくれへんということやろ」

その通りだと齊藤は深く頷いたのだ。

岡田は神戸大学医学部を卒業後、研修医時代の95年6月から1年半強を千船病院で過ごしている。当時から千船病院の産婦人科は、未受診妊婦を含めて可能な限り「断らない方針」を貫いていた。そして、上司だった北垣壮之助は研修医

に対して寛大だった。

「当時は(研修医に対しては)トラブルにならないようあまり実地をやらせないという病院もありました。北垣先生は、患者にとっていいと思うことはやりなさい、もし何かあったら自分が責任をとるからとおっしゃってくれた。その後も自分は千船病院に育てられたという恩義をずっと感じてました」

2003年に岡田は自らの強い希望で千船病院に戻ってくるようになった。今、

北たちに言い続けているのは、研修医時代に掛けられた言葉だ。

「北垣先生から、人から求められるような医者になれと言われたんです。若い人たちが千船病院で働いて良かったと思うてくれること。彼ら、彼女たちは優秀だから、ぼくらを軽々と超えていくでしょう。ここで学んだことを糧に次のステップに進んで欲しい。医師だけでなく、ここに関わる人みんながそうであって欲しいですね」



もっとも嬉しいのは、お産の時の感想や感謝を伝える手紙をもらったとき

千船病院、麻酔科医長の角千里が、無痛分娩に関わるようになったのは、前任地の関西医科大学附属病院だった。

「病院の方針で無痛分娩をやるようになりました。そうしたら、あっ、これ面白いって思ったんです」

無痛分娩では主に「硬膜外鎮痛法」が採用されている。硬膜外腔という背中の脊髄に近い場所に局所麻酔を打つ。麻酔の効果は下半身のみ、妊婦の意識ははっきりしている状態である。

「一般的には陣痛が来ると、子宮口が開き始めます。4、5センチ開くとお母さんの痛みが激しくなります」

最終的には子宮が10センチほど開き、そこから赤ちゃんが出てくる。子宮の収縮、出口付近が引き延ばされる刺激が、脊髄を伝って痛みと感じる。そこで硬膜外鎮痛のカテーテルを入れて、経路を麻痺させる。

「難しいのは人によって痛みの強さも麻酔の効き具合も違うこと。麻酔の量が少ないと痛みがとれませんが、逆に効き過ぎると陣痛が来ているという感覚もなくなってしまう。そうすると（赤ちゃんを押し出す）力がはいらなくなってしまいます」

身体を動かしたときに管が抜ける、あ

るいは麻酔薬が誤って血管に入ってしまったことがある。血管に入った場合は、全身に麻酔が回り、最悪、母親の死に至る。

「無痛分娩を希望されるお母さんには、まず『無痛分娩外来』で、麻酔を使う利点、リスクを説明します。その上で不安に思っているのかを伺います。例えば、歯医者者の局所麻酔で動悸が激しくなったり、気が遠くなったり、麻酔のアレルギイがあるんじゃないかと怖がる方もいらっしゃいます。麻酔の仕組みを説明してアレルギイではないと理解してもらおう。ゆっくり、そしてしっかりお話をすることを心がけています」

手術室で働く麻酔科医は、覚醒している患者と顔を合わせて話をする機会が少ない。一方、無痛分娩は違う。外来での相談から出産まで付き合いが続く。

「最初は、足繁く患者さんのところに行くけど、邪魔じゃないかな、って心配でした。きちんと話すことで不安が解消されることが分かってから、距離感がつかめるようになりました」

角がもっとも嬉しいのは、退院後にお産の時の感想や感謝を伝える手紙をもらったときだ。

「やる気の源になります。全部、めっちゃ大事にとっています」
そう言うにつこりと笑った。





私は高度な手術を行う「第2の手」。器械の向こうの患者と向き合う

千船病院のあらゆる手術を担う手術室。特に、高度な技術が必要とされるロボット支援手術へ積極的に取り組んでいる。実はこの手術室には、専属の看護師がいる。千船病院に入職以来、勤務6年目になる橋爪紀香だ。

「看護学校を卒業後すぐに、手術室を担当する手術看護科に配属されました。『やってみよう』と思いましたね。配属希望表を埋めるために第3希望に書いたものの、新人だし一般病棟に配属されるとばかり思っていたので……」

高度な専門知識と技術が必要とされる手術看護の仕事。不安と戸惑いからスタートしたが、気づけば「今まで1度も異動希望を出したことがない」ほど、やりがいを感じている。千船病院が力を入れる手術支援ロボット「ダヴィンチ」の扱いを極めたいと、多忙な業務の間を縫って「ダヴィンチコーディネーター」の資格も2021年に取得した。

さまざまな手術において、手術内容ごとに異なる器械を事前にセッティングし、手術中も次々と執刀医へ器械を手渡す。例えば人工関節の手術の場合、約60種類もの器械を使用。最初は戸惑ったものの、今では指示されなくとも適切な器械

を差し出せる。また、同じ手術でも患者の体位や執刀医の立ち位置によって条件が異なってくる。日々の手術録画を研究することで「スムーズに手術できるのは橋爪さんのおかげ」と執刀医から言われるほど、熟練の域に達するようになった。「私は、執刀医の第2の手。タイミングよく器械出しができているときは、先生と一緒に手術しているような感覚になれるんです。スムーズな器械出しは先生にも喜ばれますが、何よりも患者さんのため。滞りなく手術がすすめば手術時間の短縮になり、患者さんの体への負担も減るからです」

手術看護の業務をいきいきと語る橋爪には、忘れられない手術がある。父から息子への生体腎移植手術だ。

「麻酔の点滴を注入する直前、息子さんが『ちょっと待って』と。お父さんにありがとって言うっておいてもらえますか』と言われたんです。その言葉から親子の絆が感じられて、自分でも驚くほど手術に対するやる気よりみなぎりました。この経験から、患者さんに関わることを一層大事にするようになりました」

執刀医と一体化して手術器械を扱い、器械をメンテナンスする多忙な日々。橋爪のまなざしは、その先にある患者へと向けられていた。

●腹腔鏡下スリーブ状胃切除術の適応条件（アカイのどちらかを満たす必要あり）

ア	6ヶ月以上の内科的治療によっても十分な効果が得られないBMI（ボディマス指数）が35以上の肥満症の患者であって、 糖尿病、高血圧症、脂質異常症又は閉塞性睡眠時無呼吸症候群のうち1つ以上を合併しているもの。
イ	6ヶ月以上の内科的治療によっても十分な効果が得られない BMIが32～34.9 の肥満症の患者であって、以下の 2つ以上を合併しているもの。 ・ 糖尿病 ヘモグロビンA1cが8.0%以上（NGSP値） ・ 高血圧症 6ヶ月以上、降圧剤による薬物治療を行っても管理が困難（収縮期血圧160mmHg以上）なものに限る。 ・ 脂質異常症 6ヶ月以上、スタチン製剤等による薬物治療を行っても管理が困難（LDL コレステロール140mg/dL以上又はnon-HDL コレステロール170m/dL以上）なものに限る。 ・ 閉塞性睡眠時無呼吸症候群 AHI（無呼吸低呼吸指数） ≥ 30 の重症のものに限る。

ある日の午後4時、千船病院の会議室で外科医や内科医など計11人が参加してカンファレンスが始まった。モニターに映し出されたのは、40代男性のプロフィールだ。身長184センチで体重155キログラム。診察した肥満・糖尿病内分沁センター長の北浜誠一は、「本人はなんとか痩せて、パートナーと一緒にジェットコースターに乗れるようになりたいと前向きに頑張っています」と報告した。

何度も減量に挑戦したがうまくいかず、一縷の望みをかけて来院した女性——。これらの患者たちに共通しているのは、減量手術を希望している点だ。減量手術の主流である腹腔鏡下スリーブ状胃切除術は、体に小さな穴をあけて特殊な器具を挿入。胃の8割程度を切除して、細長く縫い合わせる。術後1年、1年半で平均30%程度の体重が減少するという。肥満に悩む人にとっては夢のような手術だが、望めば誰でも受けられるわけではない。スリーブ状胃切除術は保険診療だが、保険適応になるには細かな条件がある（表参照）。また保険適応になっても、リスクが高かったり、術前の行動変容が見られず減量効果が見込みづらい場合は病院としてゴーサインを出せない。この患者は本当に手術を受けたほうが幸せになれるのか。治療に関わる医師や管理栄養士、理学療法士などで構成される「減量チーム」が一堂に会して議論していたのも、手術の適応を判断するためだった。

減量手術の先進国、アメリカで見たチーム医療

千船病院は、日本肥満症治療学会が肥満外科手術実施施設として認定した17施設の1つである。2016年に糖尿病・減量外科を開設して以降、実績を重ねて

症例数は累計400件（2022年7月現在）に達した。2021年度の手術件数は100件で全国2位を誇る。千船病院を日本有数の減量外科施設に引き上げた中心人物が、減量チームを率いる北浜だ。北浜は京都大学医学部時代、がん研究の道に進むつもりだった。しかし、実習先で知り合った医師が献身的に患者に接する姿を見て臨床に舵を切った。外科医になり、日本における腹腔鏡手術第一人者のもとで腕を磨いた。ただ、腹腔鏡手術のトレーニング制度はアメリカのほうが進んでいる。もっと上手になりたいという一心で渡米し、フェローシップ先で出会ったのが減量手術だった。「病院の受付の方がほっそりスリムな人の経験者。当時、減量手術は日本で年間50件程度でしたが、私が勤務した病院では週15件行っただけハイボリューム（件数が多い）。将来、日本でもメジャーな手術になると確信しました」アメリカで見えてきたことがもう1つある。チーム医療の重要性だ。「日本は数が少ないので、医師が患者さん1人ひとりに時間をかけて診ることができませんでした。一方、アメリカはハイボリュームなので、多くの専門職が関わって分業しないと対応できません。将来、日本で減量手術が広がるなら、チーム医療体制の構築が必要だと感じました」

減量手術チーム
減量はしんどい。だからこそ、チーム医療が必要

8割程度を切除して胃を小さくすることで、平均30パーセント程度の体重が減少する——。これだけ聞くと肥満に悩む方にとっては夢の手術のように映る。現在主流となっている「スリーブ状胃切除術」自体の難易度は高くないという。重要なのは術前から術後までのケア。まさに「チーム医療」であるのだ。

取材・文 村上敬
ビジネス誌を中心に、経営論、自己啓発、法律問題など、幅広い分野で取材・執筆活動を展開。スタートアップから日本を代表する大企業まで、経営者インタビューは年間50本を超える。

写真 奥田真也

日本に減量手術を根づかせたい——。北浜はアメリカで3年間学んだ後、帰国して減量外科を立ち上げるために東奔西走する。2つの病院で実際に開設したが、さまざまな事情で軌道に乗らなかった。三度目の正直で巡り合ったのが千船病院だった。「話をいただいて面接に行っても、現場から『切らんでも内科的治療で十分』」万が一事故が起きたら大問題」と反対の声があがることが多い。しかし、千船病院は外科部長はじめ、内科や栄養科の先生、事務方もみなで『おもしろそうやね』とサポータータイプ（協力的）でした。糖尿病の先生もいらっしやるし、減量のチーム医療をやるならここだなと」

「できるだけ切りたくない」内科医が考えを変えた理由

2016年、北浜は千船病院で糖尿病・減量外科を立ち上げる。減量手術に限らず、チーム医療の鍵となるのが外科と内科の連携だ。一般的に内科は「切らずに済むなら切らないほうがいい」と考える傾向がある。この壁を乗り越えるため、北浜は自分が最初に診察することにこだわった。「多くの病院は、まず内科の先生が診て、手術以外に選択肢がない患者さんを外科に送ります。このやり方では、たとえ内



【上段左から】
栄養管理科主任 管理栄養士 田中理恵子
肥満・糖尿病内分泌センター長 北浜誠一
呼吸器内科部長 住谷充弘

【下段左から】
糖尿病内分泌内科部長 中島進介
医事科主任・減量コーディネーター 平井麻衣子



科の先生がサポートタイプでも手術にいたる患者さんは増えませんが、減量外来のファーストタッチは必ず私が診ます」

だからといって北浜が手術へ前のめりになっているわけではない。チームの一員である糖尿病内分泌内科部長の中島進介は、「北浜先生はすごく慎重」と明かす。「減量手術後しばらくは特殊な食事しか食べられません。それを無視して普通の食事をすればリスクがあります。北浜先生は患者さんが約束を守る人だと確信を持ってなければ、たとえ保険適応の条件を満たしていても手術をしない。はじめから手術ありきではないから、私たちも率直に意見を言えます」

今こそ減量手術に協力的な中島だが、千船病院に来る前は、健康な人の胃を切ることに否定的だったという。

中島は鹿児島大学医学部を卒業後、千船病院で初期研修を行い、「全身を診られる医者になりたい」と内科を選択した。神戸大学医学部附属病院で糖尿病内分泌内科医として研鑽を積み、2019年、7年ぶりに古巣の千船病院に復帰した。肥満関連疾患の治療を数多く手がけて内科医として自信をつけた中島が、「減量外科の存在は知っていたが、前向きにはとらえていなかった」と考えるのも無理はなかった。

千船病院に戻ってきたとき、すでにチーム医療の枠組みはできており、気乗りしないままチームに加わった。しかし、

減量手術を受けた患者を診察して考えが変わった。

「インスリンを1日100単位以上打っていた糖尿病患者さんがゼロになっていた。他の患者さんもだいたい葉が大きく減っている。信じられず、『こんなにたくさんさんの薬を一気にやめて大丈夫ですか』と同僚の先生に聞いてしまったくらいです」

効果を目の当たりにしてから、積極的にチームに関わるようになった。症例が積み重なり、手術に踏み切った人とそう

でない人の生命予後や薬価の比較もデータで検証できるようになった。中島の中で減量手術は、いまや「患者さんにすすめていい治療」という位置づけになった。

管理栄養士は食事だけでなく患者のメンタルと向き合う

チームで患者ともっと顔を合わせる機会が多いのは管理栄養士だ。

減量治療の中心は食事のコントロール。

千船病院減量外来での中断率はコーディネーター導入前と比べて明らかに減少し、手術にいたる症例数も増加傾向にある。

もう1つの役割が、院内の連携だ。減量チームは総勢40人。基本はカンファレンスや個別連絡で情報をやりとりするが、抜け漏れや齟齬が生じやすいところはコーディネーターがカバーする。

予定されていた手術が延期されたことがあった。肥満患者では10種類以上の内服をしていることも多い。最近ではジェネリック医薬品の広まりもあり、薬剤数が以前と比べ格段に増えている。薬の中には手術の数日前に服用をやめなくてはいけないものもあり、患者にそのことが正しく伝わっていなかったのだ。

北浜は情熱型で、患者への安全性を最優先にするためメンバーに要求する水準も高い。このときも看護師や薬剤師に、チェックリストの改善を求めたものの、逆に「先生から明確な指示がないとわかりにくい」と不満が出た。

「お互いに言い分はわかります。なので、患者さんに薬の説明をする機会を2回から3回に増やす一方、北浜先生にも『みなさんこまめやってくれるから、ここで指示をお願いします』と整理しました。先生の負担が増えるからどうかと心配でしたが、先生は『ありがと〜』。結局、みんな患者さんによくなくなってほしいという思いは同じ。ただ、それぞれの立

日本ではまだ数が少ない減量コーディネーターを導入

さまざまな専門家が集まる減量カンファレンス。ほぼ全員が医療従事者だと目でわかる制服姿だが、1人だけ事務の制服に身を包む女性がいた。減量コーディネーターを務める医事科主任の平井麻衣子だ。

アメリカではコーディネーターを置くことが珍しくないが、日本ではまだ数少ない。役割は2つある。1つは、チームと患者をつなぐこと。外来で初診の予約が入ると、コーディネーターは患者に連絡して現在の症状や肥満の原因などを問診する。話を聞くうちに、「幼少期に満たされない気持ちを食べ過ぎてまぎらわせたことが肥満のきっかけだった」と深いところに話が及ぶことがある。こうした情報も含めて北浜に事前に伝えておく

と、初診がスムーズに行く。

診察や栄養指導に来なくなった患者に連絡することも多い。平井はキャンセルの理由をこう明かす。

「たいしては術前減量がうまくいかなかったりリバンドした患者さん。先生に合わせる顔がないと思うのか、急に来なくなってしまうんです。それではもったいない。電話越しに患者さんの状況を推察して、治療を続けたほうがいいことをご説明します」

場や性格で言葉がズレることがある。それを翻訳するのがコーディネーターの役目だと思っています」

平井は前任者の退職に伴い、同じ医療法人が運営する高槻病院から異動してきた。高槻病院では秘書のような動きもしていた。調整ごとは経験があった。ただ、医事科の中でも平井に白羽の矢が立ったのは、彼女の性格が買われたところも大きかったのだろう。

「北浜先生はマイペースで、徹底してシステム改善を図ろうとするので話が長い。全部聞いているところは仕事が進まないから、先生と打ち合わせするときはドアから半身を外に出して、いつでも逃げられるようにしてます(笑)」

本人が聞いたら気を悪くしかねないことも、嫌味なく言えるキャラクターは、まさしく調整役向きだ。平井が前任者からコーディネーターを引き継いだのは2021年の年末。すでにチームの潤滑油として不可欠な存在になっている。

新メンバーが続々参画 進化を続ける減量チーム

減量外科が開設されて6年。チームの連携がよくなるにつれて目に見えて変化した数値がある。入院日数だ。手術を始めた2016年の平均入院日数は7.9日から2021年は6.6日に、平均術

後在院日数は5・3日から2・2日に短縮されている。北浜はこう評価する。

「減量手術はいろいろな検査をして、患者さんをベストコンディションに持って行って手術に臨みます。チーム医療の強化でリスクを減らせるようになったことが、（入院）日数短縮につながっていることは間違いない」

円熟味を増した減量チームは、いまや院外からも注目される存在になりつつある。2020年には聖路加国際病院に、2021年には京都大学病院、神戸大学病院へ、手術導入の支援を行った。北浜は、「手術だけを指導してもうまくいかない」という。

「大事なのは外来。チームで診ないと、結局、院内でたらい回しになって、患者さんの通院中断につながります。だから外来の見学も受け入れていきますし、私たちのやり方もシェアしています。減量手術を行う施設があまり増えると自分たちの症例が少なくなってしまうことを懸念して、最初は迷っていた部分もありました。でも、減量手術の裾野が広がれば患者さんの利益になる。もう出し惜しみしている場合じゃない」

ノウハウを広くシェアするようになったのは、減量チームが今も進化を続け、他院は簡単に追いつけないという自負があるからでもある。

2021年7月、チームに強力なメンバーが加わった。睡眠呼吸障害を専門と

病院は「病」を治す場所である。そのため、病院にやってくるのは、怪我を抱えた、あるいは身体が弱った、もしくはゆっくりと人生の下り坂に差し掛かった人間がほとんど。その中で新生児をとりだす産科は少々、趣が違う。助産師の奥山敬子は子どもと接するとき「(心身をリラックスさせる)マイナスイオンが出てるようだ」と表現する。いわば柔らかな光に包まれた一角である。その中でも自然分娩に特化した院内助産院に写真家、奥田真也が密着した。



する呼吸器内科部長の住谷充弘だ。睡眠呼吸障害の治療が減量にどうかかわるか。住谷は自身の役割を次のように話す。「睡眠呼吸障害がある患者さんのほうが、術後半年の痩せ方が小さい。術前に治療介入することで、睡眠呼吸障害がない方と同じレベルに痩せられる可能性があります」

メンバーの拡充はさらに続く。今年度は、体に穴をあけるのではなく、内視鏡デバイスを用いたスリーブ状胃切除を開始する予定で、それに向けて医師の参画も検討されている。

専門家が知識と経験を持ち寄ることで、日本の減量手術をリードする千船病院減量チーム。ただ、北浜曰く、チーム医療の意義は専門性の結集や分業による効率化だけではないという。最後に北浜はチーム医療の重要性をこう強調した。

「減量はしんどいんです。だから患者さんの頑張りややる気の素を見つけて、励ましていく必要があります。そういうポイントでは1人だと見落としかねませんが、チームならいろんな職種の専門家がそれぞれの角度で拾い上げて、みんなで共有できる。それがチーム医療のいいところですよ」

減量コーディネーターの平井は、北浜を「熱くて話が止まらない人」と評した。その評価どおり、北浜の熱弁はなかなか止まらなかった。

院内助産院に密着 「自然分娩」24時





千船病院の5階には、出産に関する診療科が集められている。エレベータを下りて左側、東館が『地域周産期母子医療センター』だ。これは母体胎児集中治療室(MFICU)6床、新生児集中治療室(NICU)15床、新生児回復室(GCU)20床を備えた大阪府でも有数の分娩施設である。

そして右側の西館が産科となっている。この一画、分娩室を挟むように2つの和室がある。約12畳の室内には小型のテレビ、冷蔵庫、CDラジカセ、ビーズクッション、ちゃぶ台……。旅館の一室のようなこの部屋が奥山敬子の仕事場である。

「千船病院の特徴ですか？ 早産、ハイリスク(出産)など全てを受け入れる、オーラルマイティな感じですかね。色んなことを経験させてもらえるので、最初に働いた病院がここで良かったと思っています」

奥山は愛仁会看護助産専門学校を卒業後、系列の千船病院に入職した。現在、奥山は、陣痛促進剤、麻酔などを使用しない自然分娩を行う『院内助産院』に所属している。

通常、妊婦は妊娠12週から24週まで4週間に1度、医師の健診を受ける。24週以降、自然分娩を希望する妊婦を助産師の奥山たちが引き継ぐ。

「基本的に正常経過している方、そして前回の分娩が帝王切開でなかった方、妊娠合併症のない方、逆子や双子など多胎でない方で、ご本人と家族が希望し、医師の許可



がある人は院内助産院でお産ができます」

2021年、千船病院の院内助産院での分娩数は年間367件、これは全分娩数の約15パーセントにあたる。

24週以降、30週頃と35週頃の2度、医師による妊婦健診を除けば、出産、そして出産以降を助産師が併走する。かつてこの街にもあった助産院を病院の中に移植したものと考えていい。

「お産って順調に進んでいても、いきなり赤ちゃんがしんどくなってしまったり、産まれた後にお母さんが大量出血になるということもあるんです。その意味で、病院内で何かあればすぐに先生に診てもらえるという環境でできるのは私たちにとっても安心。お母さんたちも自由にお産に取り組みる点でいいと思います」

奥山が医療の道を志したのは早かった。「昔から人のために働く仕事に興味があったんです。テレビで救命病棟24時みたいな番組、五つ子ちゃんの番組とかあったじゃないですか。そこからなんとなく看護師になりたいなと思っていました」

看護学校で学ぶうちに、助産師に興味を持った。

「看護(学校)の実習で、色んな診療科を回るんです。お産の現場に立ち合わせてもらったとき、すごい楽しいなと思った」

産科って、また産みに来てねーって言えばじゃないですかと奥山は笑った。

助産師になるには、まず看護師の国家試



験に合格、その後、規定の養成機関で1年以上学び、助産師国家試験に臨まなければならない。奥山は国家資格取得後、助産師のコースに進んだ。ただし、見学するの自分で行くのは別の問題だった。

「(助産師の) 実習のとき、もう緊張で頭が真っ白になりました。命をとりだすという責任感がすごくて。でも経験を積んでも慣れるということはないですね。今も緊張します」

院内助産院での出産に立ち合うのは、基本的には助産師のみ。

「陣痛が来たら入院。破水したら電話をもらって入院してもらいます。私たちがやるのは、お母さんの産む力を発揮してもらう

こと。いかにその力を引き出すか。ご飯食べたくないけど、食べようかあ、とか、ちよつと歩いたほうがいいよ、とか。ほんまはしんどくて部屋で寝ていたところを頑張っ歩いてもらう。歩くとお産が進されるんです」

出産前の母親は、とかく神経質になりがちである。奥山が自分に課しているのは、前向きな言葉で妊婦に寄り添うことだ。

担当の助産師が子どもを取り出し、もう1人は点滴の管理などのサポートに回る。このときも助産師は妊婦の手を握り、言葉で励ます。

「めっちゃ痛いの、何にも進んでないやん、どうなっているんや、つてなりがち

んです。そこで、大丈夫、大丈夫、呼吸、上手、赤ちゃん、元気にしてる。可愛い子が出てくるよ」とか

子どもを取り出すのは技術と経験が物を言う。

「スピーディに出てきすぎると、お母さんの身体に傷が付いてしまう。ゆっくり、ゆっくり。ただ、赤ちゃんは、狭いところを通る。しんどくないように出してあげないといけない。適切なスピード、(取り出す) 角度があるんです」

「昨今、感染症対策のため、父親の立ち合いが認められていない。そこでサポートする助産師がスマートフォンを使って、出産の状況を中継することもある。スマートフォンの向こう側と繋がっているという感覚は母親にとっても心強い。

出産後の1ヶ月健診も助産師が担当する。「妊娠中から知っている人のお産をして、1ヶ月後で大きくなった赤ちゃんを見るとすごく嬉しい。赤ちゃんって可愛いし、マインスイオンが出るような気がするんです。一緒に出産を喜べるって、めっちゃ、ありがたいことやって思います。日々、私たちは赤ちゃんから元気をもらっているんです。千船病院にいると、世間で言われている少子化というのは感じたことはないです」

「ここ、少子化じゃないなって思うんです、大きな声で笑った。



わがし屋よだもち

「雑穀とあんこの団子」 190円(税込)



2軒目

レトロとモダンが心地よく融合した空間で、シンプルながらも個性が光る和菓子づくりを行う「わがし屋よだもち」。店主の與田さんが注文を受けてから餅を焼いたり、餡をくるむので作りたてをいただけるのがうれしい。注文した「みたらし団子」のみたらしは、醤油数種類に隠し味としてコーヒーの風味も。「甘いだけでなく、香ばしいコクも感じるメリハリがいいですね」。4種類から選ぶ「雑穀とあんこの団子」は「自家製きな粉とこしあん」をチョイス。「細かいきな粉と餅が対等に主張していて食べ応えがあります」

わがし屋よだもち
大阪市西淀川区千舟2-2-6
☎ 06-6476-3622
【営】11:00- 売り切れ次第終了
【休】月曜日・火曜日
出張イベントによりお休み有 (SNSにて告知)
@wagashi.yoda
※現在感染対策のためイートインスペースはご利用いただけません



1軒目

「米粉と豆乳のふんわりカステラ」 300円(税込)



C3 Little Garden

店長の渡辺さんお気に入りの多肉植物や自ら描いたアート、地元のアーティストの雑貨などが出迎えてくれる物販スペースの奥に、靴を脱いで上がる和室や中庭を臨むソファスペースなどが続く隠れ家的なカフェ「C3 Little Garden」。「米粉と豆乳のふんわりカステラ」は、「ひんやりしていて、ムースのように軽く食べられますね。米粉の風味と豆乳のしっとり感を感じられて、味わい深いです」と米田先生もにっこり。

C3 Little Garden
大阪市西淀川区姫里2丁目3-13
☎ 06-7508-7352
【営】11:00-17:00
【休】月曜日・土曜日・日曜日
@c3_little_garden



西淀川区 スイーツ散歩

ケーキから和菓子まで、
なんでもあり!

こめだけいめい
産婦人科の米田圭明先生は、大の甘党。医師の控室である医局で、おいしいスイーツを頬張っている姿を目撃されています。そんな米田先生と、千船病院のある西淀川区の美味しいスイーツの店をてくてく散歩してきました。千船病院に来られる際には、立ち寄ってみてはいかがでしょうか。



おいしいスイーツが
ほかにも色々!

3軒目



chou chou



「なめらかプリン」 308円(税込)
「ロールケーキ」 385円(税込)

chou chou (シュシュ)
大阪市西淀川区御幣島2-7-5
☎ 06-4808-0298
【営】11:00-19:00
【休】水曜日及び不定期木曜日
@chouchou1125

本格パスタから絶品スイーツまであらゆる調理を手掛ける娘・佳寿美さんと、お店の中を明るく取り仕切る母・裕美子さんの母娘が営むカフェ「chou chou」。特に裕美子さんが佳寿美さんから引き継ぎ毎朝4時半から仕込む「なめらかプリン」は幅広い世代に人気で、米田先生も「するする食べられてしまう」とその手が止まらない。国産小麦使用の「ロールケーキ」は「フォークが入りにくいほど弾力がある生地、たっぷりの生クリームが贅沢ですね」と驚きの顔。「クリームも嫌みがなく食べやすいですよ」

あー
しあわせー



栄久堂吉宗

天保元年(1830年)からの味を守り続ける和菓子屋。フレッシュバター、卵黄を使用した黄身あんの洋風銘菓「吹上」は、数々の受賞歴を誇り、榎原神宮や明治神宮にも献上されている自慢の一品。

大阪市西淀川区佃3丁目1-6
☎ 06-6471-2405
【営】9:00-18:00
(日曜日のみ9:00-14:00)
【休】第4木曜日
https://eikyudo-yoshimune.co.jp



こまめ商店

小豆が主役のパン屋さん。看板商品の「おはぎパン」は甘さ控えめに炊き上げた十勝産の小豆と黒米のハーモニーが絶品。温めるともちもち感がよりアップするのでオススメです!

大阪市西淀川区姫島5丁目16-40
☎ 090-1894-2819
【営】火・木 11:00-14:00
水・金 11:00-17:00
【休】月曜日・土曜日・日曜日
@sugi.komame



CeNOTE

尼崎商店街で40年以上愛されている「ロリアンクレープ」のフランチャイズ店でありながら、CeNOTE限定メニューもたくさん! 人気NO.1は王道の「生クリームバナナチョコ」

大阪市西淀川区出来島2丁目9-44
☎ 06-6473-2204
【営】12:00-17:00
@ce_note_cafe

- 診療科
- センター
- 診療補助部門

薬剤科



患者によりそった薬物治療を実現するため、地域との連携、患者にあった「くすり」の提案を実践します。

消化器内視鏡センター



常に内視鏡技術の向上に取り組み、最新の内視鏡機器を駆使して安全かつ苦痛の少ない内視鏡診療を提供します。

脳神経外科



一次脳卒中センター（PSC）として24時間365日脳卒中・脳卒中を疑う患者さまを受け入れています。

画像診断科



各種の画像検査・画像診断・診断装置を利用したインターベンショナル・ラジオロジー（IVR）を実施。

糖尿病内分泌内科



糖尿病・内分泌疾患に幅広く対応します。

放射線科



24時間各種緊急検査が可能。また、地域の医療機関からの検査依頼にも積極的に対応。

肥満・糖尿病内分泌センター



高度肥満症・2型糖尿病など生活習慣病に対して内科的または外科的治療を包括的に行っています。

耳鼻咽喉科



耳・鼻・喉の諸症状が何によって生じているものなのかを正しく診断し、最適な治療方針を提示します。

外科



待期手術も緊急手術も患者様のご希望にそえるよう、できる限りからだに優しい低侵襲手術で素早く対応します。

消化器内科



地域の需要に断ることなく迅速に対応し、丁寧な診察と内視鏡検査で信頼される消化器診療を心がけています。

リハビリテーション科



発症早期からあらゆる疾患に対応できる質の高い理学療法・作業療法・言語聴覚療法を提供。

地域周産期母子医療センター



産婦人科専門医療チームと新生児専門の小児科医療チームが、様々なお産と高度な周産期治療を行います。

眼科



一般的な眼科疾患から、小児における斜視・弱視・内反症・霰粒腫等の小児眼科領域の診察も行なっています。

泌尿器科



ダヴィンチ支援手術・結石や前立腺に対するレーザー手術など、安全かつ負担の少ない治療を行います。

腎臓内科



腎機能障害や血尿、蛋白尿などに積極的に対応しています。

検査科



診断および治療効果の判定のため、検体検査・病理検査・生体検査を行い様々な項目を分析しています。

腎センター



腎臓専門医・泌尿器科専門医・腎移植認定医・専属看護師・臨床工学技士による万全のサポート体制。

皮膚科



皮膚・毛髪・爪について、皮膚科全般の診断と治療を行います。

整形外科



骨、関節、筋肉、神経、腱、靭帯などの四肢の運動の問題に関わり、健康寿命を伸ばすことを目指します。

呼吸器内科



呼吸器疾患・睡眠呼吸障害の治療において、ベストな治療ができるようサポートいたします。

臨床工学科



院内で使われる様々な医療機器の保守点検や操作等を行っています。

関節センター



変形性関節症、スポーツ外傷など専門的な診断と治療に関わり、病期やニーズに合わせた治療の提案をします。

麻酔科



手術から分娩まで、安全で快適で無駄のない、質の高い麻酔を提供できるよう努めています。

産科



母子センター併設の高度周産期医療、麻酔科24時間対応無痛分娩、院内助産など多様なニーズに応えます。

小児科／新生児科



小児救急医療24時間365日対応（土日祝もご紹介に対応しています）。

栄養管理科



病状や環境など個人に合わせた栄養指導の実施、おいしく・安心・安全な食事サービスの提供を心がけています。

看護部



私たち看護師は、新たな命の誕生から最期の瞬間まで、「ともに支えること」を使命とし取り組んでおります。

救急センター



西淀川区の二次救急病院として、多くの救急搬送を受け入れています。困った時の頼れる救急センターを目指して。

婦人科



腹腔鏡下手術・ロボット支援手術の認定施設であり、全国トップクラスの症例数と治療実績を誇ります。

病理診断科



米粒より小さな胃粘膜の生検組織から肺や腎臓といった臓器一塊の手術検体まで、組織形態学から全身を診断。

千船病院 TOP



採用情報



研修医・専攻医募集



ちぶね NOW



総合内科



内科疾患を中心に、診療対象とする病気や臓器・領域を限定せず診療を行っています。

循環器内科



循環器救急医療、24時間対応します。

スーパーバイザー 結城 豊弘

編集長 田崎 健太

編集 村上 敬
今中 有紀

表紙絵 朝倉 弘平

写真 奥田 真也

デザイン 三村 漢 (niwanoniwa)
大貫 茜 (niwanoniwa)

イラスト 矢倉 麻祐子

社会医療法人 愛仁会 千船病院
〒555-0034 大阪府大阪市西淀川区
福町3丁目2番39号
(阪神なんば線「福駅」下車 徒歩1分)
tel 06-6471-9541 (代表)



千船病院
広報室
河野 優雅

ちぶねびょういん？ 行ったことはあるけどよう知らんな〜。
ご来院いただいた事がある方にも初めましての方にも、魅力ある職員がたくさん居ることをぜひ知っていただきたいという想いで奔走しました。分からないことだらけで編集部の皆様から見放されなかと心配でしたが、温かいご支援を受けて、何とかこうして皆様にお届けできる運びとなりました。
制作に関わって下さった方、そして手に取って下さる全ての方に感謝を込めて。



千船病院
事務部長
中山 健太郎

千船病院のやっている医療・事業をもっと知ってもらいたい。
多くの個性あふれるスタッフで運営している千船病院をもっと知ってもらいたい。千船病院から見える社会的課題についてもっと知ってもらいたい。
変貌を遂げようとしているまち西淀川区の千船病院をもっと知ってもらいたい。そんな想いで多くの方の協力を得ながら制作を始めました。
ぜひご笑覧ください！



前 千船病院
看護部長
遠藤 瑞穂

「千船病院は敷居が高い」初めての地域の会議で、参加者から言われました。地域住民は想像以上に千船病院の医療を知りませんでした。病院内でも、「自分の部署以外は知らない」という職員が多いこともわかりました。
命がけの瞬間が病院には溢れています。命がけの患者と向き合う職員。そんなリアルを知っていただければ、敷居をなくすことにつながるかもしれないと考えました。『虹くじら』は大きな一歩です。創刊おめでとうございます。



千船病院
看護部副部長
牧山 文

いつも千船病院を利用させていただいている方も利用したことのない方も、千船病院の中身を知っていただき、私たち職員の思いを少しでも感じ取っていただけたらありがたいと思います。知れば知るほど味の詰まった千船病院です。一部ではありますが、この『虹くじら』を手にとっていただき、千船病院の中で行っている医療・看護をご覧ください。



千船病院
技術部リハビリテーション科科長
村田 尚寛

千船病院の素敵な「人」を知ってもらえる広報誌にしたいと思って関わらせてもらいました。病院の設備や技術だけでなく「人」にクローズアップすることで、設備や技術だけでなく「人」として魅力的な方々が働いている千船病院をより知ってもらえたら嬉しいです。そして「人」を見てもらうことで千船病院を身近に感じて病院に通う不安を少しでも減らせたいかなと思います。



千船病院
副院長・泌尿器科主任部長
樋口 喜英

何をすべきなのか何ができるのかと、前向きに考えて働くスタッフがたくさんいます。その姿と心を感じることでできる素敵なものができ上がりました。
特別なものではない千船病院の日常。ほんの一部ではありますが、知っていただきかけたひとときがきれいに映っています。



千船病院
看護部科長
奈良崎 由香

初めて携わる広報誌制作。“他にはないものにしたい！”と思いました。準備、調整... 根回し(笑)。辛くなり投げ出したくなった時もありました。
“このアングルで撮らせてほしい”という突然のお願いに快く応じてくださった救急隊。患者さま。職員。制作に携わってくださった方々。たくさんの方の協力と支援に助けられ救われました。『虹くじら』に“ぎゅっ”と詰まった、熱い思い、志がみなさまに届きますように。

編集委員から一言

千船病院広報誌『虹くじら』は、編集チームと病院内編集委員による会議から企画を生み出しました！



